ロシア極東総合大学、ノボシビルスク国立大学訪問記

大阪大学　高部英明

（これは、世界展開力強化事業申請の仲間に速報として伝える訪問記の 1−4 をまとめたものである。ロシア極東連邦大学とノボシビルスク国立大学を訪問した。）

旅程

1 JUL 14　-　TUESDAY
AIR Siberia Airlines　FLT:S7566　K　OK　seat 05C
LV　Narita,Terminal 2　13:55
AR　Vladivostok　18:35

3 JUL 14　-　THURSDAY
AIR Siberia Airlines　FLT:S73272 L　OK　seat 04C
LV　Vladivostok　20:45
AR　Novosibirsk　23:05

5 JUL 14　-　SATURDAY
AIR Siberia Airlines　FLT:S73273 V　OK　seat 05C
LV　Novosibirsk　21:25

6 JUL 14　-　SUNDAY
AR　Vladivostok　10:10

6 JUL 14　-　SUNDAY
AIR Siberia Airlines　FLT:S7565　L　OK　seat 05C
LV　Vladivostok　12:40
AR　Narita,Terminal 2　12:55

6 JUL 14　-　SUNDAY
AIR Siberia Airlines　FLT:S74829 L　OK　JL3005 運航
LV　Narita,Terminal 2　16:55
AR　Itami Airport, Osaka　18:15

2012 年にウラジオストックで開催された APEC 首脳会議。このときの施設跡地がロシア極東連邦大学の新キャンパスになっている。

ノボシビルスクはロシアの中間地点だった。ウラジオストックから 4500km。ウラジオストック駅が終点のシベリア鉄道はモスクワまで 9228km。一週間の旅。

ロシア極東総合大学、ノボシビルスク国立大学
訪問記（その１）

大阪大学　高部英明

（これは、世界展開力強化事業申請の仲間に速報として伝える訪問記
である。先ずは，到着初日 2014.7.1 の事など書いた）

極東大学(Far East Federal University: FEFU)はウラジオストックにある4つの大学を 4 年前にまとめた大きな大学である。政府の意向が強いようだ。ロシアの学期は 2 月始まり 5 月終了、6 月の 2 週間が試験で、6 月終わりには夏休みに入る。7 月、8 月は夏休み。今は学生、教員は出払っているところに、大学間交流の面談をお願いした。交渉を始めたのは一月ほど前で、なかなか、国際交流担当副学長の Kurilov 氏の秘書から，面談に関するはっきりした返事が来ない。

幸い、私の共同研究者で、客員教授で 3 ヶ月阪大に滞在中の A. Titov 教授の学生時代の親友が FEFU の物理学専攻の副専攻長であるという。病気煩いしていたが、今は元気が回復したというので、今回の訪問はほとんどこの Prof. Reznik を介して行った。一般にロシアの大学や研究機関への初めての訪問（友達がいない場合）というのは、やりとりに時間がかかりいらいらさせられる。日本人だからいらいらするので、ロシア人にはそれで当たり前。国柄の違いだ。このような時に信頼出来るのが，ごく親しいロシア人の友達がいるかどうかである。

FEFU からはとうとう最後まで、空港に出迎えがあるのか、Kurilov 副学長と面談できるのかなど返事が無かった。Titov が国際電話で Reznik 教授と打ち合わせてくれて「Aki-san, no problem.　Everything is ready for you」と言ってくれるが一抹の不安が残る。前日、東京泊で、成田から「今から行きます」とメイルを送ったら，ようやく「秘書の Larisa が空港に迎えに行きます」と返事があった。そして空港で彼女の出迎えを受け、その時に 2 日間の滞在スケジュールのコピーを渡された（こんなに決まっていたのなら、何故、メイルを事前に送ってくれないのよ、と恨み節）。ロシアは友人を訪ねる時以外は概してこうだ。「これがロシア式」と観念し、気の短い日本人も相手を信じて身を任せることが必要だ。今まで、7 回ロシアに来たが，毎回、大きなトラブルもなく、何とかなった。

図１　ウラジオストックへは成田からシベリア航空が運航している。２時間半のフライト。船便は境港から韓国経由で 30 時間のフェリーが週一回ある。一度乗ってみたい。

成田にはシベリア航空が運航している。本社はノボシビルスクで今回の旅程には好都合である。「ウラジオストック(Vladiostok)」は良く地図を見てほしい。大阪からだと札幌より近い。成田から 2 時間半。日本より西にあるのに時差は日本より 2 時間早い。最初は「日本より朝の早いところがあったんだ」と驚いた。原因は想像が付く。確か 2006 年にモスクワに出かけた際、モスクワの時間を 3 時間（2 時間？）早める、と聞いた。それまで、モスクワ時間を欧州の時間に近いように意図的に遅くしていたが、地理上の時刻に合わせて、モスクワ時刻を早めるとプーチン（当時は第 1 期目の大統領）が決めた（？）。後は、モスクワにならって、どこも時差を同じだけ早めたら、シベリアは日本より早くなった。たぶんそんなところだろう。

図 2　ウラジオストックは大阪からは札幌より近い。旧ロシア帝国が 1860 年の北京条約で清国から割譲した地。意味は「東方を征服せよ」。ロシアの執念が伝わってくる。

ウラジオストックでは 2012 年に APEC がプーチン議長の下、開催された。その際に空港、高速道路を建設した。軍用地で立ち入り禁止であったウラジオストック街の目の前の図 3 の下の大きな島、ルスキー島を開放した。ホテルや会議場など建設、ウラジオストックのある半島からルスキー島に通じる大きな橋（図の黒いところが市街地、左先端に橋を架けた）の建設と、市内高速道路の建設とプーチンの面目をかけて 1 兆円のインフラ整備が成された。街全体に活気が生まれたそうである。その後、APEC 終了後、ルスキー島（島の広さは香港島の 2 倍、人口は 1/1000 位）の APEC 会場跡全てが FEFU の新キャンパスの建築物となった。多くの建物（中には学生寮も完備）群と広いスポーツ施設、屋内プールから森のような散策スペースまで揃っている。

図 3　ウラジオストックがある半島（黒い部分が市街）その南にある島が FEFU 新キャンパスがあるルスキー島。この島にはあらゆる所に要塞がある。

驚くのはこの建物群（図 4 参照）が APEC 開催時に全て利用されたとのこと。APEC 首脳は 20 人程度だが、お付きの人のホテル、会議場、会場運営する裏方の方々の居住区からホテルまで、全て入れて、これだけの巨大な施設が必要だそうな。その際に、プレスや各国からの参加者、その人達の面倒を見るメイドなどすごい数の人がここで会期中に居住していた。だからこんな建物群が必要になった。国際部の人は「学生寮でも三つ星ホテル並みです」と自慢していた。私の部屋は四つ星並みのツイン。

新キャンパスのホテルに宿泊している。到着日にレストランでビールを飲もうとしたら、なかなか意味が通じない。Alcohol, Beer と言っても通じない、じゃ Whisky?というとようやく意味が通じたが、「Niet, Niet」と、身振りで、キャンパス内は飲酒禁止と教えてくれた。このだだっ広い自然に恵まれたキャンパス

図 4　空港や市内から右奥の大橋を渡るとキャンパスがある。建物群とスポーツや散策の広いエリアがある。学内には４台のバスが学生の移動用に無料で運行している。

ライフを送ることは、勉強か、運動か、恋愛か、自然の中で哲学にふけるか、睡眠位しかすることがない。勉強にくる阪大生にはまさに絶好の環境である。でも、ロシアの学生と人脈を形成していくと、たぶん、酒のありかを教えてくれると思います。人脈形成がロシアでは何よりも、生き残るためには必要です。

図５　私のホテルのフロント。長いテーブルの中程に受付がいる。APEC で利用された高級ホテルです。

それでも、新キャンパスには文系を中心に一部しか、まだ移転していない。Prof. Reznik 達、自然科学研究科は物理の実験装置など大きな施設もあるので、まだ、市内の旧キャンパスにいる。むしろ、長

期滞在者にはこちらの方が便利、風情があり、生活感がある日々が送れるから。しかし、ここも秋には現在建設中の自然科学研究棟の 2 棟の建物が完成して，移転するそうだ。研究には便利になる。

図 6　私が泊まったホテルの部屋からの風景。奥手のガラス張りの建物がキャンパス中央の APEC 本会議場。ここでは、大学入学説明会を開催していた。

キャンパスが孤立しているように書いたが、新キャンパスと市内を結ぶ市バスが 10 分ごとに運行していて、人工美に飽きたら、市内の雑踏に逃げ込むことも出来る。阪大の留学生は学生寮に滞在することになると思うが、学生寮はホテル並みにきれいとのこと。APEC のために建設した施設だから。私の部屋からホテルの玄関を眺めたのが写真６である。奥に見えるガラス張りの建物が、APEC の本会議場になった建物。

図 7　月形のビル群に囲まれて海に面したキャンパスには家族連れやカップルが長い夜を楽しむかのように散策している。

夏休みとあってか家族連れやカップルがキャンパス内で運動したら歩いたりしている。季節的には９月が一番良いそうである。今回、２日間同行してくれた地球物理が専門の Larisa は「冬が乾燥していて良いですよ。気温も-10～-15 度くらいだし」と平気な顔していう。今は、朝夕、霧が立ちこめる季節。部屋からまだ大変明るい夜８時過ぎにキャンパスを覗くと、だんだん霧が立ちこめて視界が狭くなっていく。

空港は北に 50km 以上の場所に、これも APEC のために新空港が建設された。大学までは、これも APEC のために建設された高速道路で 1 時間弱の距離である。途中に広がる「原野」のような緑の大地を見ながら、狭い島国に住んでいる私には、とてもねたましく感じた。ロシアにはまだまだ住めるところがとてつもなく広がっている。

ロシア極東総合大学、ノボシビルスク国立大学
訪問記（その２）

大阪大学　高部英明

（これは、世界展開力強化事業申請の仲間に速報として伝える訪問記である。本題の大学間連携について7月2日に国際部の方々と話した）

ロシア極東連邦大学(Far East Federal University: FEFU)とは阪大はたくさんの部局が協力協定を結んでいる。今回の申請を契機に、これを大学間協定にしようと、国際交流責任者の Kurilov 副学長とコンタクトを試みた。彼の専門は法学で、仲間の法学部・福井さんが昨年１０月に法学研究科同志の協定を結ぼうと面談したそうだ。この申請事業は当初、交流分野は工学か言語文化しか指定されておらず、その分野で阪大内のインド・ロシアに興味あるグループを探してきた。所がある日「法学も参加したい」と情報を聞きつけて連絡があり、早々に面談した。私は個人的に「国際化が一番遅れるのは医学部、二番目が法学部」と勝手に理解していたので、福井さん達の熱の籠もった国際化の話しには感銘した。

Kurilov 氏は，1990 年代の変革期に学長に選出され、4 期 20 年近く学長の地位にあった方だそうだ。実は今回大変お世話になった物理の Reznik 教授と大変仲が良く、彼は Kurilov 学長から、研究担当副学長に就任してほしいと言われていたそうだ。しかし、体調を壊したことも有り、のびのびとなっていた。そこへ、APEC2012 開催に関連して、4 年前に当時首相のプーチンが彼の人脈から学長を突然送り込んできた。結果、Kurilov は副学長に降格となり，今に至る。今回，彼は中国への出張があったため、私は会うことが出来なかったが、彼の部下の Andrey M. Bobylo(Director, Development of International

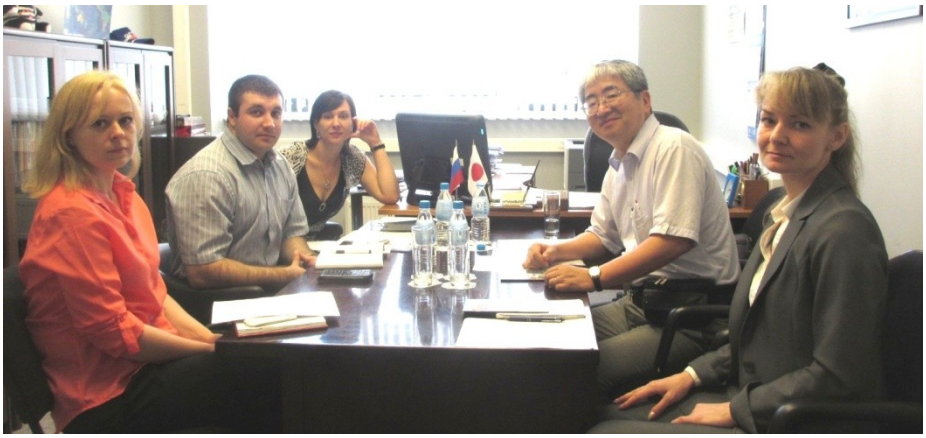

図 1　国際部の Bobylo 氏と 2 名の責任者。今回の申請内容について先ずは説明し、色々な質問に答えた。FEFU は東北大から桃山学院大まで 10 以上の日本の大学と交流をしている。語学研修の学生の受け入れが一番多いようだ。彼が大学名をすらすらと言うので驚いた。関係は深そうだ。阪大は新参者という感じ。右端が Larisa。

Education Project)ほか 2 名の国際部の方が 10 時から対応してくれた(図 1)。年間何人くらいが留学してくるのか。どんな分野の交流か。ロシア人学生は英語は余りうまくしゃべれないが大丈夫か、などなど矢継ぎ早に質問された。英語に関してはインド・日本の学生含め日本の歴史や文化、経済、政治など、教養教育を英語でおこなう。講義は半分が議論の時間にする予定だから，無理にでもしゃべらせる。日本人学生も同じで，勉強はしてきたが話す機会が無かったのでロシア人と同レベル。気にすることはない。英語も上手にして帰してあげるよ、と見栄を切る。

1 時間ほど面談をした頃に、別の女性が入ってきた。彼女は昨年から始めた「サマースクール」の責任者。スクールは先ずはロシア語の語学研究コース。2 ヶ月間だそうだ。80 人ほどが今年は受講している。このうち 28 人が日本人。多いのは新潟からの参加者で、彼・彼女達は三井関連企業が経済的に支援して送り込んで来たそうだ。インドもそうだが，世界中、夏休みに 2 ヶ月の「夏コース」を開催するのが標準になって来ている。問題は期間だ。米国も欧州もロシアも 6, 7 , 8 月が夏休み。だから、大学を休まずに世界中のサマースクールに参加できる。やはり、日本もグローバル化には「桜の下で入学式」など明治の発想から飛躍して、学期を世界に揃える必要がある。

図 2　9 月から新学期。入学希望の高校生に学部の内容など説明するための沢山のブースがホールに並んでいた。カラーのパンフで高校生を引き込もうと躍起。別のホールでは卒業式をしており、着飾った女性が家族や友達と一緒に会場から出てきていた。

彼女は「夏の学校で今年からインターンシップも始めた」と宣伝してくる。分野は「石油・天然ガス資源工学」と「医療センター」。2 週間の集中的な実践的研研修のプログラムを用意している。是非、阪大にも伝えてと頼まれる。期間は 2 週間だそうだ。英語で対応してくれる。

一応、今回の訪問の目的の 1 つは成し遂げた。Bobylov 氏と固く握手をして Kurilov 氏にこの話を宜しく伝えていただくようにお願いした。部屋を出たついでに、APEC の本会議場であったこの建物を見学した。出たところは広間になっていて、図 2 のように新入生勧誘の各学

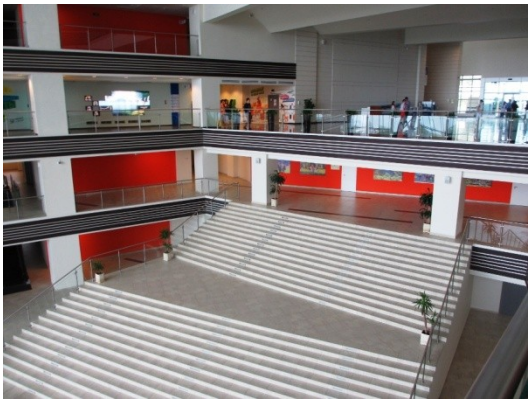

図 3　APEC2012 の中核建物玄関ホール。

部学科のブースが並ぶ。図 2 の広間の右手は、APEC での記念撮影用と思われる階段が図 3 の写真の様にある。APEC では記念撮影などに使われたホールであり、天井は吹き抜けで 6～7 階建ての高さがある。

昼食までの間に、車で島を案内してくれるという。「Battery」の見学と書いている。「バッテリー？」。事前に辞書で調べた。砲列のある要塞である(図 4 参照)。旧ソ連時代（というか、日露戦争当時も）にはこの半島や島への外部の人間の立ち入りは軍が禁じていた。有名なところでは、黒海から大西洋、喜望峰と航海し日露海戦に加わろうとしたバルチック艦隊が、先ずは、この軍港にたどり着き、補給を行い，兵の鋭気を養い、戦いに臨もうとした。しかし、東郷平八郎率いる日本帝国海軍は、当初、艦隊が対馬から日本海を軍港に向かうか、太平洋から津軽海峡を通るかで、議論噴出。対馬航路に狙いを定め、日本海で秋山真之の海賊戦法（T 字型戦法：村上水軍の古書から発想を得た）で歴史上、類のない完全勝利を納めたことは有名である（蛇足：このことからロシアの南下政策で数度の苦い戦争を経験したトルコでは東郷は神様とあがめ立てられている）。

図 4　ウラジオストックのある半島と南西のルスキー島は太平洋艦隊の要の基地。島と半島には赤黒く描かれた要塞が転々と築かれている。

図 6　ルスキー島の南端の岬をにらむ 30cm 艦砲。島はあらゆる方向からの適に備えて要塞がある。

その後、ソ連と名は替わっても、南から攻めてくる日本海軍や満州国からの関東軍に備えるべく、どんどん要塞は建設された。建設は第 2 次世界大戦終結まで続き、最後の砲弾は 1972 年に号砲を鳴らして静まったそうだ。今は、それがこの島の唯一の観光資源（？）。図 5 の大砲の下は 5 階建てになっていて、砲弾の格納庫まで含め全て見学できる。

図 5　ウラジオストックは今も現役のロシア太平洋艦隊の軍港である。しかし、フェリー波止場からは係留された軍艦がはっきりと見える。その後ろには観光用の実物の潜水艦が陸に飾っており、300 円払えば中の見学も出来る。

昼食後、まだ市内のキャンパ

スにある自然科学研究科を訪ねる。ここで、Riznik 教授が他の 5 人の教員と私を迎えてくれた。Riznik 教授（以下、Boris）は英語がなかなか上手。彼の専門は Sasha と同じ核物理理論。「Sasha とは 40 年の付き合いだ。Sasha は今のカザフスタンのアルマ市の出身。俺はここ。その 2 人がモスクワ北 100km の Dubna の核物理研究機構で机を並べて勉強し、その後もず～と，共同研究を続けてきた。Sasah がこの前来たのは 2 年前かな。10 年ほど前には 2 人で大阪の会議に出たぞ。なんて名の会議だったかな～～？」と、そこで私が「もしかして、PANIC 会議？」と聞くと、「そうだそうだ」。「実は私もあの会議には土岐さん（当時、阪大核物理研究センター長）に呼ばれて、参加していたんだ」。「なんだ、同じ会議に出ていたのか～～」と、感嘆しきり。

Boris が続ける。「日本には何度か行った。90 年代にウラジオストックから横浜まで船を貸し切り、国際会議を主催したことがある。Sasha も参加してくれた、が、あの時は準備など大変だった」と懐かしむ。

こんな話しをした後、大学間交流の話しをする。私が内容を説明した。教授同士が共同研究を実施するグループに限り、学生の交換留学を支援する。学部生は Larisa から聞いたが、国が指定する必修科目が沢山あるので、なかなか、半年抜かるなどは難しそうだ。彼等は阪大で行う予定の夏の学校（6-7 月）に参加して単位を取得。やはり、大学院生が対象になるかな。Larisa はロシアには単位という概念がないとのこと。それは、今後検討だ。Joint Degree の可能性など説明する。

こう書いたが、すんなり英語で説明できたわけではない。彼等の何人かは英語が苦手なようす。Boris が Larisa にロシア語訳を促す。私の説明を逐次、Larisa がロシア語訳する。Larisa はこの研究科の国際交流担当を兼務している准教授。後で書くが、ご主人は九大の先生だ。色々質問を受けて、その後、最新のレーザー装置を持つ実験室を見学して交流を終えた。今日は 6 時から Boris がロシア料理のレストランに連れて行くとのことで、それまで、市内観光。

図 7　街の高台から右に軍港と半島内の別の橋。右下がフェリー乗り場とその奥がシベリア鉄道の終着駅。Larisa と。

図 8　モスクワから 9288km 離れたシベリア鉄道極東の果ての駅、ウラジオストック駅構内にて

Sasha を良く知るという運転手が今回、全て彼のトヨタ・ランドクルーザーで移動をしてくれた。24 万 km も走っているのに、きれいでエンジンも爽快だ。彼がロシア語で色々と市内の名所を説明してくれるのを、Larisa が英訳してくれる。印象に残ったのは最後のロシア皇帝・ニコライ II 世が皇太子時代に日本を訪問し、大津で巡査に切りつけられた「大津事件」。その後の訪問地がウラジオストックだったそうで、彼を歓迎するために凱旋門を建設していた。しかし、大津事件で早々にウラジオストックで養生するため、日本を退散した皇太子の到着に完成を間に合わせたという凱旋門が復元されていた（もちろん、当初の凱旋門はソ連時代に破壊された）。

港を望む高台に無名戦士の墓があった。クレムリンの裏にある墓地と同じく途切れることのない炎が、愛国者を称えている場所だ。日本は靖國問題で無名戦士の墓と、外国人も気軽に手を合わせることが出来る場所がないのは国家として問題である。私はどこの国に行っても（2 年前、イスラエルに行った時は、エルサレム見物の最後は、ホロコースト記念館だった）無名戦士の墓には頭が下がる。そして、平和を願う。

その直ぐ近くにシベリア鉄道の終点、ウラジオストック駅がある。駅の待合室は 40 人も入れば一杯になりそうな狭い駅。そこからプラット・ホームまで降りる。写真８がそれだ。モスクワから 9288km という記念碑が構内になる。待合室にはノボシビルスク行きやモスクワ行きがある。ノボシビルスクはこれから向かうが 4500km、列車で 4 日半かかる。モスクワには 1 週間。新幹線はいらない。乗客は乗り合わせた人との会話を楽んだり、と、ゆったりと時間をすごすそうだ。レールの幅を見て広いのに驚いた。欧州の広軌より広い。Larisa が「シベリア鉄道は全てこの幅。ドイツ軍が列車で攻めてこないように、意識して 10cm 広くしたの」と教えてくれた。

６時に Boris が待つロシアの伝統料理レストランで降ろしていただく。まずは「とても冷たいビールがほしい」とお願いした。蟹の海鮮サラダに海鮮料理、ワインも出て、彼との話も弾む。色々あったせいか、彼は、訥々（とつとつ）と話しをする。私が昨年、Sasha に誘われ Dubna の研究所を見学し、初期の加速器などそのスケールの大きさに戦後のスターリンの自信に溢れた様子を思い描いた話しなど聞かせた。中でも、１９９２年１月に核閉鎖都市・チェリアビンスク 70、所員 1 万人の研究所訪問が私の最初のロシア訪問だというと、皆驚く。そこで行われた初の国際会議で最初に Meshkov が 1 時間、一枚の図で講演した話しなどしたら、彼も Meshkov を知っていた。Meshkov はどうもこの国の核開発の英雄のようだ。

図 9　自然科学研究科の Boris と夕食の後で記念撮影。彼は、私の 6 年来の共同研究者 Sasha（共著論文を 7 件、既に書いた）の 40 年来の親友だ。

ロシア極東総合大学、ノボシビルスク国立大学
訪問記（その３）

大阪大学　高部英明

（これは、世界展開力強化事業申請の仲間に速報として伝える訪問記である。7 月 3 日は移動日。飛行機は 20：45 発。それまでの行動を簡単にまとめた）

この日、午前中は自然科学研究科の他の実験室の見学。ナノテク研究、磁性体の新素材開発研究、高圧電子顕微鏡による生物からナノテク材料までの学際的な計測グループなど。振動を避けるために実験室は全て地下にある。今は夏休みで、たまたま、研究室の責任者がいる実験室のみの見学となった。6 月の夏休みが始まると、気の利いた研究者は欧州や米国に共同研究に出かける。たぶん、夏休み期間、給料は出ないので、旅費滞在費支給で招待されていく。夏休みでも盆程度の休みしか取らずに働いている日本の大学教員は、世界から見れば「異常」な人達である。

図 1　FEFU の旧キャンパスにある自然科学研究科の入り口。

「給料もらっているんだから、夏休みも働きなさい」と、顰目面（しかめつら）の方に言われそうだが、その給料たるや，情けない。20 代の我が娘は某大手通信会社の東京本社に勤務。先日、帰省した時にボーナスの話になった。私のボーナスの手取りと比べて、娘は 20 万円少ないだけ。「お父さん、本当に大学の教授」と冷やかされた。こんな現実があるのに、夏も暑い大学に出てきて働けというのであろうか。ロシア人はソ連崩壊以前から、夏休みは郊外の持ち別荘（ダーチャ）に移動し、日本ほど酷暑でもない夏を優雅に過ごす。まさに、90 年代、日本が ICST という米、欧、日が資金を出した機関を通じて、旧ソ連の研究者の経済支援をした。その時、日本の仲間と「ダーチャで優雅に過ごすロシアの研究者を、アリのように働いている日本人が何故、経済支援しなければいけないのか」と愚痴ったものだ。

見学が終え、今日は市内のしゃれた場所に Larisa がランチに連れて行ってく

れるとのこと。気の利いたイタリアン・レストランで私はパスタを頂く。Larisa が「今日、修士の学位の公聴会を終えた私の知り合いで、日本語を勉強している学生がいるから、その 2 人も食事に誘いましょう」と提案。少し遅れて、2 人がきた。女子学生の方はとても明るく、日本語もかなり上手。男子学生は既に日本語を 5 年間勉強しているのに、内気な性格にも寄るのか, 余り上手ではない。

図 2　昼食に日本語を勉強しているという Larisa の学生 2 人が合流した。明るい女子学生と内気な男子学生。語学は明るく開放的でないと上手にならない。まさにその一般論を、実証してくれた 2 人であった。

女子学生に「なぜ、日本語を勉強しようと思ったの。動機は？」と聞いた。答えは「実は、私は日本語の『音』がすごく気に入っていたの。だから、あんな音で言葉を喋ってみたいな、と思ったのが動機」。驚いた。というのは，2 月末に IPC の研修で知り合った北大の Natalya さんという Novosibirsk 出身で北大に留学し、今は、北大工学研究科の留学生窓口責任者が，日本に興味を持った動機として同じ事をいっていたからだ。世界中の言葉ではイタリア語のように喋っているだけでオペラになりそうな言葉から、常に美しい言語を求めて言葉を新しくして行くフランス語。市民が喋っていると喧しいが、京劇などでは四声をうまく使ってきれいに語る中国語。聞いていて機分がすっきりする Queen’s English。早口でまくし立てる米国英語。

ロシア語はどうか。どうしても濁音が沢山あるので、余り美人が喋る言葉には向かないと思うのは私の偏見か。その点、日本語はイントネーションもなく平坦に小声で声が川のせせらぎのように流れる。その当たりがロシアの女性が喋ってみたくなる魅力を秘めているように思う。

ランチの後は新キャンパスのホテルに戻り、旅行記を書く時間に使った。5 時半に車が迎えにきた。同時に Boris も別れを惜しんで、さよなら（ダスビダーニア）の挨拶をするために来てくれた。ダスビダーニアはたしか「さようなら」ではなく「また会いましょう」という別れの挨拶。「Of course, see you soon again」である。

空港での待ち時間。そして、4 時間時差のある Novosibirsk までの 5 時間のフライト中、機中で訪問記の 2 をほぼ書き上げてしまった。

ロシア極東総合大学、ノボシビルスク国立大学
訪問記（その４）

大阪大学　高部英明

（これは、世界展開力強化事業申請の仲間に速報として伝える訪問記である。7 月 4 日は朝 10 時よりノボシビルスク国立大学の学長達と面談した。一日を報告したい）

ノボシビルスク空港には素粒子理論が専門の若手教員が迎えに来てくれていた。ノボシビルスク国立大学(NSU)の物理学専攻に 20 年来の友人 Sergei Blinnikov が兼任教授として席を置いている。物理専攻長は当日はイタリアに出かけて不在だったが、全ての面倒を同僚に命じてくれていた。夜の 11 時頃、4 時間の時差の中、空港に降り立つ。11 時でも写真 1 の様な明るさだ。

図 1　夜 11 時に到着したシベリア航空の便から，まだ明るさが残る空港に降り立つ。

そうだ、大切なことを書き忘れていた。お世話になった Larisa はこの週の土曜日には 11 才の息子とご主人が勤める九大に行く。1 年の滞在を予定している。ご主人の専門は地球物理学。10 年前に留学した先生の研究室でポスドクをしている。彼女も研究者なので、何とか研究できる環境で仕事を探したいといっていた。「九大には知り合いもいるので、また会いましょう。ご主人に挨拶しますよ」と伝えた。幸せな滞日生活を送れることを願う。

ホテルまで 50km。深青な空の下をタクシーでホテルに向かう。1 時間弱かかる。ホテルは大学の本部の直ぐ横にある「Gold Valley Hotel」。値段の割にはうらびれたホテルである。明日は 10 時から学長 Mikhail P. Fedoruk 氏との面談である。早々に就寝したが、余り眠れず。

4 日朝、歩いて 5 分の本部ビル 3 階、学長室に向かう。かなりごついタイプの学長である（図 2）。歓迎ぶりは相手側の人数に表れている。私が一通り、こちらの申請内容の説明を行い、質問となった。この NSU とはロシア語、物理学の 2 分野が交流する事になっている。まず、ロシア語を学びに来る阪大生を受け入れるクラスはあるかと聞くと。「もちろん」と外国語学部の Galina Kurkina 部長が答える（写真右から 2 人目）。彼女が英語で説明を続ける。「阪大からの学生を歓迎する。ロシア語の教育には実績がある。NSU はフィリピン語などマイナーな言語も含む沢山の言語を教えている。ロシアでも有名である。日本語学科

図 2　学長（中央青シャツの方）や副学長達と大学間交流について話し合う。言語学部からは学部長、副学部長（右端の 2 人）が参加し、ロシアからの留学生に是非、日本の文化や歴史など，日本をより良く知るための教育を授けてほしいとお願いされる。私達の「教養プログラム」を説明。私は日本近代史を英語で講義する予定である。単位は出せないが。

も有名である」。

「ここには日本語専攻の学生が沢山いる。交換留学生を受け入れていただい場合、日本語はもちろんだが、日本文化などについて教えてもらえるのか」と女史が聞いて来た。そこで、私が申請書に書いた「教養」の必要性とそのための講義をインド・ロシア（阪大生も含め）の学生用に英語で行う予定である旨伝える。「私は物理学者だが、日本の近代史を英語で教えようと考えている」と答える。すると彼女は驚きながも、「人脈形成には教養が必要であるという、貴方の考えに全く同感だ」と。私は「さて、他も含めて教える先生はどうなることやら」とは、声を飲み込む。

他の副学長からも、物理、語学以外も交流ができないかと質問される。具体的には「Faculty of Humanities との交流」、情報担当副学長からは「情報に関連する交流は出来ないか」と聞かれる。まず、前者については「阪大には人間科学研究科(Human Science)がある。ここでは、5 年前から英語ですべて教育する学部コースを設立し運営している。この学部との交流は可能性があると思う。情報に関しては阪大には情報科学研究科(School of Information Science and Technology)という大学院専攻が最近設立された。本プロジェクトに入ってもらおうと研究科長などとも話したが、希望者がいなかった。しかし、紹介をすることはできる。

すると、副学長が「私は会津大学に先日でかけた。研究者と共同研究している。次に中堅の 2 名が日本に行く予定になっている。その際に、阪大を訪問することは可能か」と聞いて来た。「もちろん、希望するなら情報科学の研究科長を紹介する。何時でも歓迎する」と。彼等からは、「交流分野が物理とロシア語となっているが、情報など他の分野も含めることは可能か」としつこく聞かれ

た。私は「既に分野と大学の名前は申請書に書いて提出している。だから、採択されたとして、他の分野も直ぐにとは行かない。しかし、交流してみて互いに非常に有益だと判断するなら、将来的に含めることは可能かも知れない。基本的に、私は両者が是非交流したいというなら、支援したいと考えている」と答える。

「Humanities」学科という学部はインドでもよく見かけたし、ロシアの NSU にもあり、その専攻長も参加していた。これは私の想像だが、インドもロシアも多民族国家である。そのような多様な国家を理解し、人々の絆になるような学問をしていくのだろうか。そこで、Humanity を辞書で引いたら「the humanities」で「人文学、人文科学（哲学・史学・文学・語学など）」という説明が 4 番目にあった。要するにこれは「人間としての教養学」という解釈も出来る。まさに、このプロジェクトは The Humanities を基礎にした 3 国間の人脈形成を目指すと形容できるのかも知れない（詳しくご存知の方、お教えください）。

その他、色々な人から聞いた事で皆さん興味あることを記しておこう。ロシアの教育省も世界大学ランキングに熱を入れているようだ。現在、モスクワ国立大学が首位だが、100 位にも入っていない。次がサンクト・ペテルブルグ国立大学、3 番が NSU である。ロシアは威信をかけて、100 番以内に 10 大学を入れようと、10 大学支援事業を昨年度始めたそうだ。文科省の諮問委員会の結論「日本の 10 大学を世界ランク 100 位内にいれる」によく似ている（真似かもね）。年間 10 億ルーブル（約 30 億円）を各大学に 3 年間支援する。3 年で約 100 億が 10 大学に転がり込む。NSU も 10 大学に選ばれた。

どこの国も研究者は順位などあまり気にしないが、大学を管轄する省は世界中が大学ランキング協奏曲に踊らされているようだ。昨年、ベルリンのフンボルト大学の数学・物理専攻長と面談した時、冷めた声で「俺たちはランキングなど興味も無いのに、政府が世界ランキング向上の競争的資金を公募するんだ。何を考えているのかな」と言っていた。先日、文藝春秋 7 月号に Oxford 大学の刈谷さんが「日本の大学が世界の『落ちこぼれ』になる」という記事を書いていた。その中で、「英国では世界ランキングが少しでも落ちようなら、有名大学の学長は首になる」と書いていた。ランキングに関する調査を、元祖の上海交通大学に取材に行ったこともある（記事は http://homepage2.nifty.com/AkiTakabe/ にあり）。フランス政府は上海のランキングを利用しているようで、ランクが下がると学長の給料も下がるそうだ。そこで、仏の知り合いの学長から SJTU の張傑学長に「何とか出来ないか」と電話がかかることがあるそうだ。学長でも、どうもしようがない。

図 3　昨年 7/12 に MIT 出身の友人と総長の前で講演した。第 5 位 MIT の Times ranking。次の阪大と比べると一目瞭然。

良く引用される The Times のランキン

グでは、大学の国際化（外国人教員の割合、留学生の割合）などが大きな比重を占める。Oxford 大学は学生の 6 割が外国人。だから、日本の大学は Times ランキングでは皆低くなる。QS ランキングは研究などの比重が高く、阪大も 50 位以内に入る。SJTU は大学の研究力に評価を絞っている。国際化などの評価点はない。上海が火を付けて、意図せず、後続の Times などが世界中の大学の国際化を促すことになった。

図 4　阪大のランキング 147 位。日本の大学はどこもそうだが、赤い「国際性」が極端にスコアが低い。

今回、私が訪問したことで Top100 入りに力を入れている NSU としては「これがうまくいけば阪大からの留学生や研究者が来て国際化が高まり、ランキングの点も良くなる。すばらしい提案をありがとう」と大変感謝された。皆さんまだ評価項目と配点を良く知らないようだ。ランキングを上げるのは大変なんですよ。皆さんも一度、The Times World University Ranking を検索して、評価基準を読んでご覧なさい（1 年前だが、この PC にある資料で図 3 の MIT と図 4 の阪大を比較する。何より国際化の点数が阪大は低すぎる）。国際化だけでなく、「大学の運営経済基盤の堅調さ」も評価の対象で、少しずつ減る運営費に頼る日本の国立大学は，ここでも渋い点をもらっている。米国の Top10 は基金だけで 1 兆円近く持っている（これも詳しいデータが高部の HP にあり）。

国際化から少し離れて、ロシアの大学事情を書こう。本部の玄関の入ったホールに入学希望の高校生への案内ブースが多数設置されていた（図 5）。ロシアでは大学入学は統一試験の点数が必要。合格したとしても安心は出来ない。1 年次は全て必修科目で勉学する。その結果、成績の悪い学生は退学勧告。10～15%の学生が退学処分に。彼等はどうするか？　大学を続けたい者は、NSU の郊外の街などにあるランクの低い大学に受け入れてもらう。しかし、これでは出世はあきらめ、その街で就職することになるそうだ。厳しいね。

阪大生が留学した場合、学生寮に入るとするといくらかかるか聞いてみた。学生寮は夏休みなど国際会議参加者のホテル代わりに利用したりする（2003 年に参加した Oxford 大学の会議がこのケースで、各カレッジは国際会議を誘致し、参加者の宿泊や食費で運営資金を稼いでいる）。部屋にもシングル、ツインと色々あるそうだ。それでも一泊 20 ドル（2000 円）程度。近くにマーケットなども有り、学生も自炊すれば安くつく。家賃が安いと，沢山の学生を送り出すことが出来る。

図 5 本部の玄関は進学希望の学生達の受付ブースだった。

最後に皆で記念撮影(図 2)して会議は 1 時間強で終了した。その後、物理の専攻長代理（図２の左から 2 人目）が、研究室など案内してくれた。彼はロシア・シベリア科学アカデミーの核物理研究所の研究者。ノボシビルスクには科学アカデミーの研究所が 15 ほどあるそうだ。その研究所群の主な研究者は NSU の教授も兼務している。彼の SUZUKI のランドクルーザーで、研究所に移動、見学をした。

彼の研究は液体アルゴンを用いた「ダークマター」の計測器の開発である。ダークマターは、物質との相互作用が極めて弱いが、輝いている通常の物質よりずっと沢山宇宙には存在していることが色々な観測から明らかになっている。ニュートリノより弱くしか相互作用しない。WIMPs などとも呼ばれている。私も 10 年以上前に核物理の土岐教授と「quark nuggets がその正体」ということを示すために院生に宇宙初期のシミュレーションをさせたことがある。しかし、光の密度が高すぎて、nugget 同士が重力で成長できない事がわかり、quark ナゲット仮設を否定した経緯がある。

図 6　彼のダークマター精密計測装置のある共同実験棟。地下には電子－陽電子衝突実験用の加速器がある。直線加速でないのでエネルギーは 2GeV+2GeV で衝突する。

まず、彼がビューグラフで装置の説明をしてくれた。その上で実験室内部に。図 6 がその建物である。地下に電子とその反物質（陽電子）を加速して衝突させる素粒子実験の加速器がある。スペースが狭いのと、長円形と云う事もあり両粒子ともエネルギーは 2GeV が限界。電子同士の衝突は生まれる素粒子がきれいなのできれいなデータが得られる。

この研究所では加速器を製造して米国やスイスの CERN などに供給し、研究資金を稼いでいる。大きな収入源だそうだ。今日、昼食は取らず、6 時から dinner に連れて行くというので、見学後別れてホテルに帰る。昨夜のフライトもほとんど寝てないので、かなり疲れている。ホテルに戻り、うたた寝をする。近くにマーケットがあるので買い物をする。その周りには露天商が沢山並ぶ。「カザフスタンには職がないので、ここで働いている」というおじさんが売っていた黒いサクランボを 100 ルーブル（300 円）分もらう。

図 7 人なつこいおじさんが露天で果物を売っている。カザフスタンから出稼ぎに来ているそうだ。「カザフスタンには仕事がなくてね。俺の名前は？？と言うんだ。あんたの名前は？」と聞く。「俺は Aki という名だ。日本から来た。100 ルーブル分もらうよ」と、札を出す。

すごい量くれた。1kg 以上ありそう。

この歩道には、図 8 の様に、一間間口のテント小屋がずらりと見えなくなるところまで並んでいる。まだ、流通機構が前近代的で、品物を売ると言うより、手作りの服などを売っている様子。まだ、ある種、物物交換の流通経済が残っているように感じる。そして、かわいそうと勝手に思ってしまうのは、スーパーの前の通路で自分の庭で作ったと思われるイチゴなどをかごに入れて売っているお年寄りが多くいること。たぶん、養なってくれる若者が家族にいないと，年金だけでは生活が出来ないので、日がな一日、強い紫外線の下でイチゴを売っている。事情は良くわからない。

図 8 ホテルから 5 分も歩くと、スーパーとこのような物物交換に近い個人商店が先が見えないほど軒を並べる。テントは常設されているようで、個人が所有しているのか、ロシア名物のマフィアから借りているのか。良くわからない。

図 9　スーパーの入り口付近には、不揃いなイチゴの山盛りを売るおばあさん達が、30 度を超える熱さの中、買ってくれる人を待つ。

韓国で街を歩くと良く感じるが、流通機構が日本の様に発達していないので、大型店の進出が少ない。日本なら私が子供の頃のような一間間口の店が軒を並べている。「これで、生活していけるのかな」と要らぬ心配をしてしまう。ロシアも事情は似ているようだ。大型店というのはまだ、限られていて、多くは一間間口の店が歩道の両側に並ぶ。昨夏、モスクワで会議に出たが、その時も会場のロシア科学アカデミーのグロテスクな建物に通じる歩道には、プレハブ仕立ての小売店が軒を連ねていた。ある意味、映画「夕陽丘 3 丁目」の世界である。

図 10 物理教授と彼の彼女(my friend と紹介してくれた)。そして素粒子の彼。

6 時前になり、迎えがきた。車で出かける。10 分も走らないところに雰囲気の良い店があった。図 10 は店の前で撮影。このレストラン、数カ国はありそう

な国の料理を出す。SUSHI の特別メニューもあった。ビールも世界中。アサヒビールも置いていた。4 人でテーブルを囲んで話しをする。彼女は英語を喋らない。素粒子君は寡黙。教授は声帯をやられていて、大きな声が出ない。まずは、私は黒ビールを頼み、乾杯して飲み始める。サラダとボルシチと肉料理を私は注文。結局、私が一人で喋っていたような感じで、皿が空くのが一番遅い。レストランは図 11 のように、私の好きな作りになっていた。

図 11 ディナーを頂いた大学近くのレストラン。今の季節は森林浴をしながら食事をしている気分になる。私は世界中どこでも屋外テーブルが好きだ。こんな雰囲気のレストランだと食欲も湧くし、つい、おしゃべりになってしまう。

ここで、大学の教育の話なども聞いた。やはり、学部生は決まったコースの教科が必修で、選択科目はほとんど無い。単位互換の話しをしたが、私が単位（credit）とは何かを説明しなければ通じない。彼等には単位という概念はない。必修科目には長い教科も短い教科もあり、とにかく、コース・メニューを全て合格しないと卒業できない。この段階で学部生の単位互換は、かなり議論しないと行けないようだ。「透明性が高く、質保証された単位互換制度」の設立が求められている。日本側は一教科の講義と試験の時間を阪大の単位読み替えにして決めることになるだろう。ロシアの留学生には、ロシア側がどの様な条件を提示してくるかである。ボルシチでスタートするロシアのフル・コース・メニューの中程に、寿司や蒲焼きのメニューを差し込んでも、ロシアの大学が歓迎してくれるかである。

図 12 ホテルの 4 階の部屋からの景色。透き通る青空。目にしみる高木の森。皆、T シャツで短い夏の太陽を味わっている。気温は 30 度を超えている。冬は雪がつもり、最低気温は－30 度程度だそうだ。「冬も良いから，またおいでよ」と言われた。

ノボシビルスクの緯度は樺太のさらに北、カムチャッカ半島中程である。しかし、この季節、太陽の下は本当に暑い。空気が乾燥していて紫外線がきついし日光が吸収されずに肌に刺さる。滞在が短く、市の中心に出ることは出来なかった。しかし、ホテルからタクシーで空港まで走る間、市街地と呼べるところはなかった。土地は有り余るほどにある。また来る日を楽しみに。（ウラジオストック到着 2 時間前）